

# === T A C S 情報 第6号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和6年7月2日

農業技術課 広域普及指導センター

## 1 気象経過

### (1) 気温

5月の平均気温は、17.9℃（対平年差+0.4℃）と平年並であった。

6月上～中旬の平均気温は、22.5℃（同+1.7℃）と平年に比べかなり高かった。

6月下旬の平均気温は、24.4℃（同+1.9℃）と平年に比べ高かった。

### (2) 降水量

5月の降水量は、228.5mm（対平年比 186%）と平年に比べ多かった。

6月上～中旬の降水量は、32.5mm（同 45%）と平年に比べ少なかった。

6月下旬の降水量は、117.5mm（同 118%）と平年に比べ多かった。

### (3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、18.0MJ/m<sup>2</sup>/日（対平年比 98%）と平年並であった。

6月上～中旬の平均全天日射量は、22.5MJ/m<sup>2</sup>/日（同 123%）と平年に比べかなり多かった。

6月下旬の平均全天日射量は、15.9MJ/m<sup>2</sup>/日（同 105%）と平年並であった。

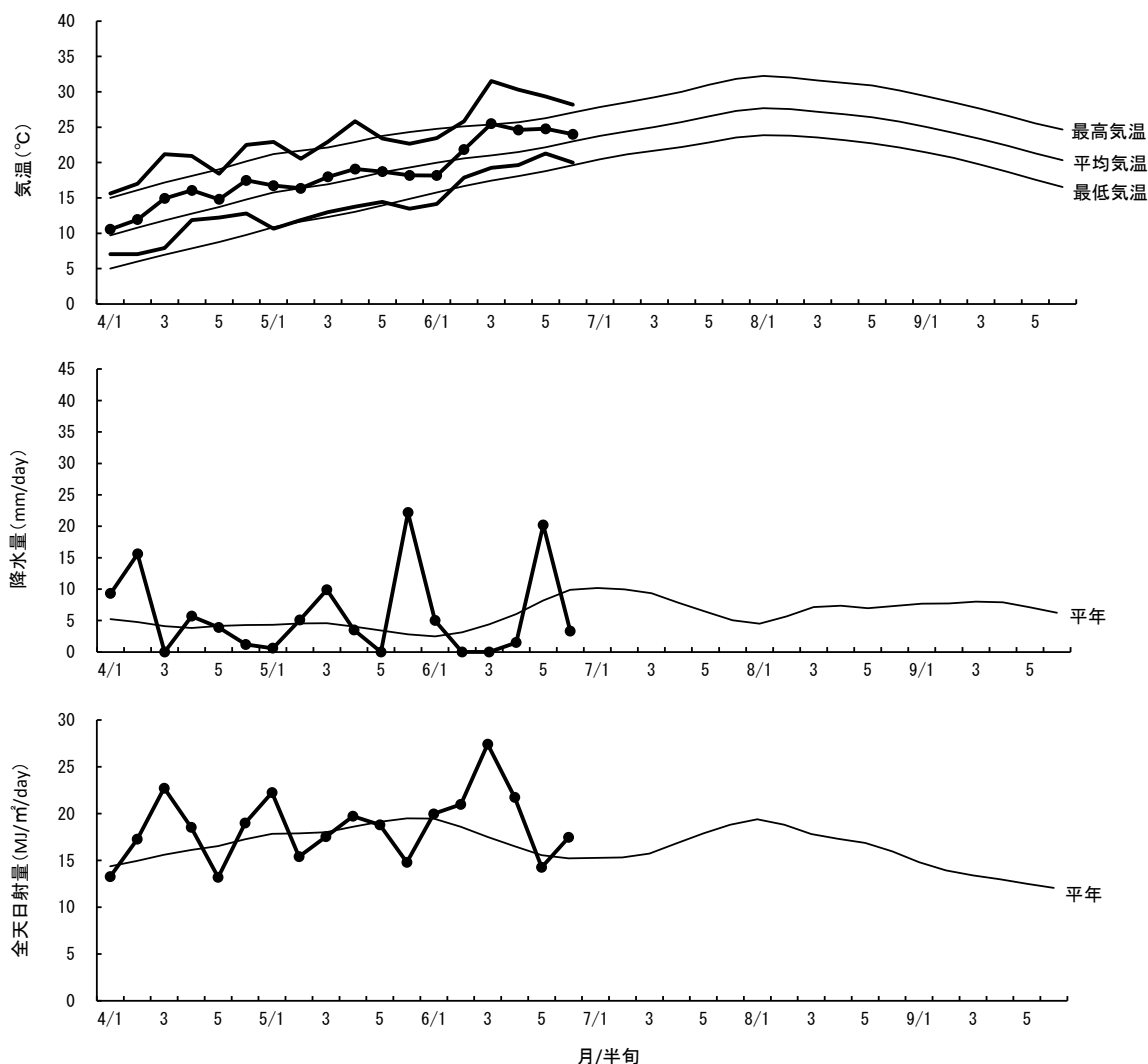


図1 令和6年の気象経過（富山地方気象台）

## 2 生育状況（生育観測ほデータ）

### （1）てんたかく

平年に比べ、草丈は並、茎数はやや多く、葉色は淡く、葉齢は0.4葉進んでいる。  
葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈は並、茎数はやや多く、葉色は淡くなっている。

今後、平年並の気温で推移した場合、出穂期は平年に比べ1日遅い7月16日頃と見込まれる。

表1 「てんたかく」の生育状況（7月2日 生育観測ほ）

年次	田植日	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R6	5月2日	64.5	31.4	670	12.5	4.2	39.1	6月25日	(7月16日)
R5	5月3日	63.5	27.1	575	12.2	4.3	38.4	6月24日	7月15日
平年	5月4日	63.6	29.5	634	12.1	4.4	38.6	[6月24日]	[7月15日]
前年比・差	-1	102	116	117	0.3	-0.1	0.7	+1	(+1)
平年比・差	-2	101	106	106	0.4	-0.2	0.5	+1	(+1)

注1) 平年：H26～R5の平均、ただし幼穂形成期、出穂期の平年値[ ]は、R2～5年の平均

注2) 本年の出穂期は予測値

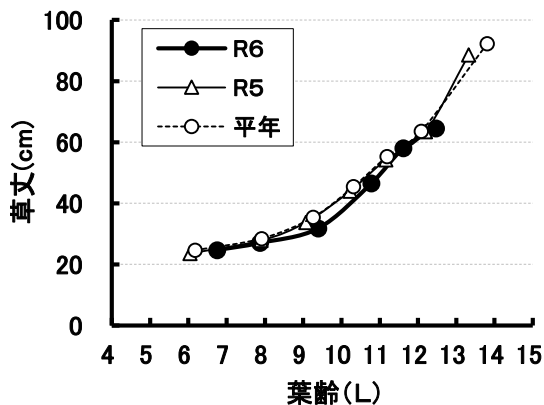


図2 草丈の推移（生観てんたかく）

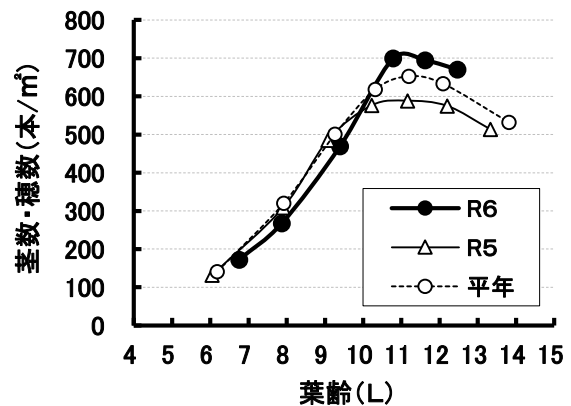


図3 茎数の推移（生観てんたかく）

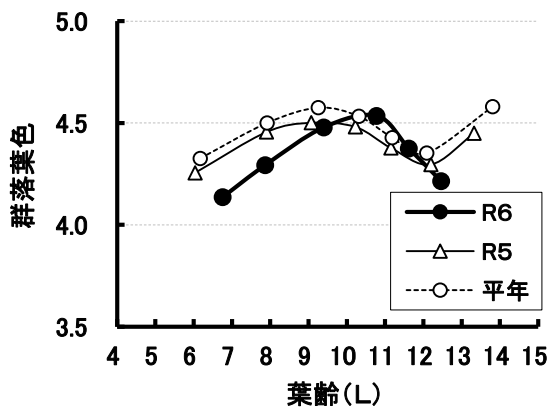


図4 葉色の推移（生観てんたかく）

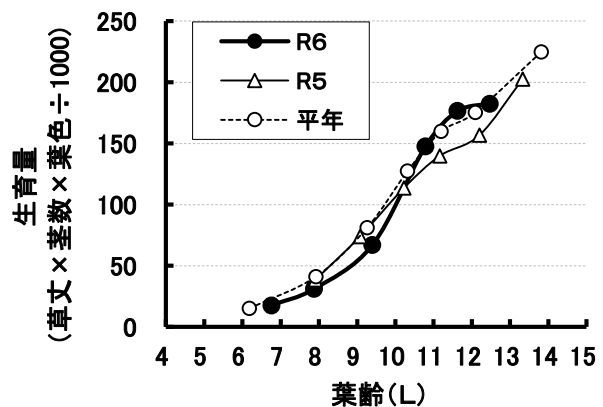


図5 生育量の推移（生観てんたかく）

## (2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈、茎数、葉齢は並、葉色はやや淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ1日早い7月10日頃と見込まれる。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（7月2日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R6	5月14日	59.8	25.4	540	11.2	4.0	35.6	(7月10日)
R5	5月13日	58.7	22.9	495	11.1	4.1	35.1	7月10日
平年	5月14日	57.5	25.0	544	11.1	4.1	36.9	7月11日
前年比・差	1	102	111	109	0.1	-0.1	0.5	( 0 )
平年比・差	0	104	102	99	0.1	-0.1	-1.3	( -1 )

注1) 平年 : H26~R5の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

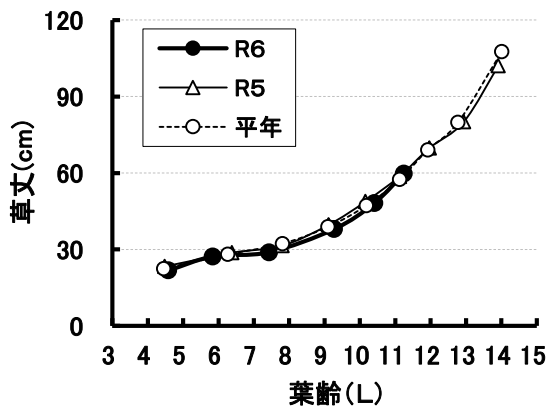


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

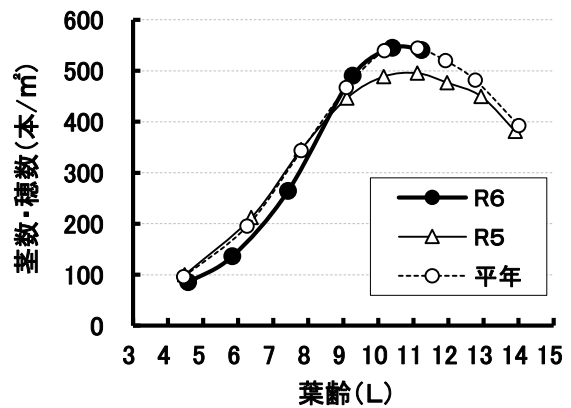


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

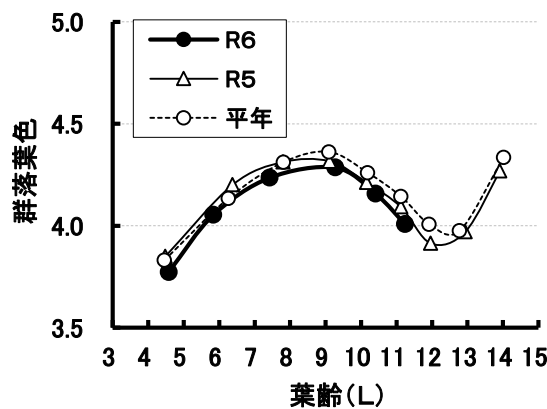


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

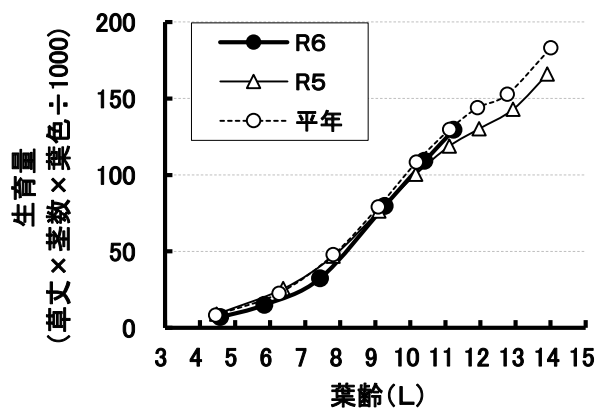


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

### (3) てんこもり

平年に比べ、草丈は長く、茎数、葉色は並、葉齢は0.5葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数はやや多くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ2日早い7月10日頃と見込まれる。

表3 「てんこもり」の生育状況（7月2日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R6	5月8日	55.2	36.3	687	12.7	4.2	38.7	(7月10日)
R5	5月10日	50.6	34.1	660	11.9	4.1	37.3	7月13日
平年	5月8日	50.2	35.1	670	12.2	4.2	37.2	7月12日
前年比・差	-2	109	106	104	0.8	0.1	1.4	(-3)
平年比・差	0	110	103	103	0.5	0.0	1.5	(-2)

注1) 平年 : H26~R5の平均

注2) 本年の幼穂形成期は予測値

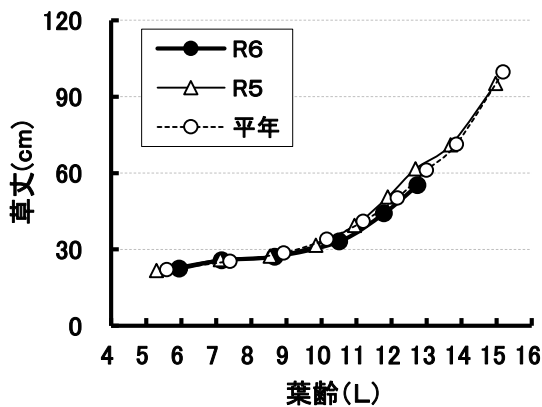


図10 草丈の推移（生観てんこもり）

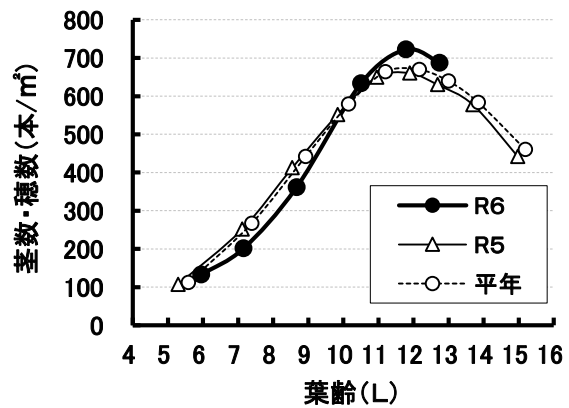


図11 茎数の推移（生観てんこもり）

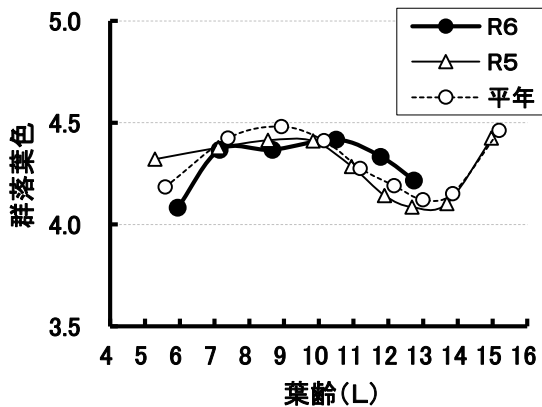


図12 葉色の推移（生観てんこもり）

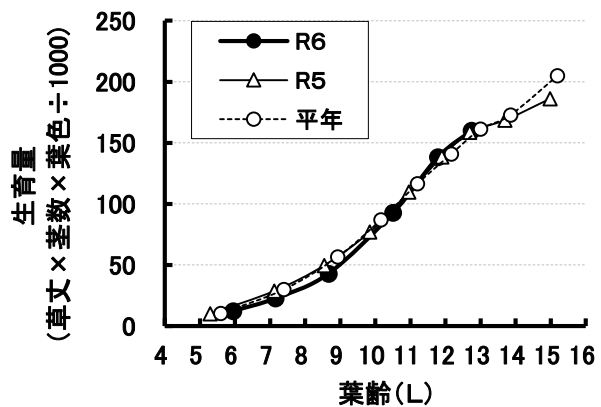


図13 生育量の推移（生観てんこもり）

### 3 当面の技術対策

- ・ 幼穂形成期までは、葉色の急激な低下を防ぐため、田面を乾かしすぎないように間断かん水を行う。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。
- ・ 斑点米カメムシ類の発生がかなり多くなっていることから、7月7日までに畦畔等の草刈りを確実にを行う。

#### (1) 「コシヒカリ」の管理

- ・ 幼穂形成期頃までは、葉色の急激な低下を防ぐため、田面を乾かしすぎないように間断かん水を行い、 土壌硬度を「足跡の深さ 3 cm 程度」に誘導する。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を行う。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では過剰籾数や倒伏を防ぐため、安易な追肥は原則施用しない。
- ・ 分施栽培では、穂肥は幼穂形成期の生育量（表 4）に応じて表 5 を目安に施用する。

表 4 「コシヒカリ」の目標生育量（分施栽培）

	幼穂形成期	幼穂形成期から7～9日後 (幼穂長15mmの時期)
草丈	72cm	82cm
茎数	470本/㎡	430本/㎡
葉色	3.8	3.6

表 5 「コシヒカリ」の分施栽培における穂肥施用量の目安

幼穂形成期の生育量	1 回目穂肥		2 回目穂肥	
	時期	N 施肥量 (kg/10a)	時期	N 施肥量 (kg/10a)
適正	幼穂形成期7～9日後	1.5	1 回目の7日後	1.5～2.0
やや過剰	幼穂形成期9～11日後	1.0～1.5	1 回目の7日後	1.5～2.0
過剰※	施用しない		出穂の7日前	1.5～2.0

※過剰：葉色が 4.0 以上で茎数が 550 本/㎡

#### (2) 「てんたかく」の管理

- ・ 出穂期は、平年に比べ1日遅い7月16日頃と見込まれる。
- ・ 出穂期までは稲体活力を維持するため、飽水管理を行う。ただし、茎数が多く葉色が濃い場合は倒伏が懸念されることから、間断かん水を行う。
- ・ 肥効調節型基肥栽培では、割籾や倒伏を防ぐため、安易な追肥は原則施用しない。ただし、出穂7～10日前（幼穂形成期から14日後）に葉色 4.0（SPAD 値 32）、砂壤土では 4.2（同 34）より薄い場合は、出穂3日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追加穂肥を施用し、穂揃期の葉色を 4.2～4.5（SPAD 値 32～35）、砂壤土では 4.5（同 35）に誘導する。

### (3) 「てんこもり」の管理

- ・葉色の急激な低下を防ぐため、幼穂形成期頃までは、田面を乾かしすぎないように間断かん水を行い、土壌硬度を「足跡の深さ3 cm 程度」に誘導する。
- ・幼穂形成期前に葉色が4.0（砂壤土4.2）より薄い場合は、速やかに窒素成分で1.0kg/10a 程度の追肥を行う。
- ・幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理を行う。



### (4) 病虫害防除の徹底

#### ア 斑点米カメムシ類

7月1日注意報発令

- ・斑点米カメムシ類が平年に比べかなり多く発生しているため、7月7日までに畦畔等の草刈りを徹底する。
- ・早生品種の防除は、粉剤又は液剤体系とし、適期を逃さず、穂揃期（出穂3～5日後頃）とその7日後の傾穂期の2回防除を徹底する。
- ・近隣に雑草地や麦あと不作付地等があると、斑点米カメムシ類が侵入するおそれがあるので防除を徹底する。

#### イ いもち病

- ・現在、県内でいもち病の発生は確認されていないが、BLASTAM情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。
- ・BLASTAM 情報（葉いもち予測システム）はこちらから    
（農林水産総合技術センター農業研究所HPの研究関連情報に掲載）

#### ウ 紋枯病

- ・前年多発したほ場で箱施薬剤を施用していない場合は、出穂3～4週間前（粒剤）または穂ばらみ期（粉剤、液剤等）の防除を確実に行う。
- ・本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表6）、適期に薬剤が株元に付着するように散布する。

表6 紋枯病の防除要否判定時期（薬剤散布適期）と要防除水準

品 種	薬剤散布適期 （防除要否判定時期）	要防除水準 （発病株率）
てんたかく	出穂14日前頃	5%
コシヒカリ	出穂10日前頃	15%
てんこもり	出穂7日前頃	(15%) ※

※「てんこもり」は基本防除とする。発病株率は追加防除の目安（暫定値）。

## エ 白葉枯病

- ・常発地等では、出穂3～4週間前にオリゼメート1キロ粒剤を散布する。
- ・ほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため薬剤を散布する。

## オ 稲こうじ病

- ・常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

## カ 着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・稲体活力の低下により発生が助長されることから、適正な施肥、水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。

# 「富富富」の生育状況と当面の技術対策について

## 1 生育状況（生育観測ほ等データ）

近年に比べ、草丈は長く、茎数はやや多く、葉色は並、葉齢は0.2葉進んでいる。  
 葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈はやや長く、茎数はやや多く、葉色は並となっている。

幼穂形成期は、近年に比べ1日早い7月12日頃と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（7月2日 生育観測ほ等）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色		幼穂 形成期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD	
R6	5月17日	54.5	28.4	620	10.9	4.3	40.2	(7月12日)
R5	5月16日	49.3	25.9	562	10.5	4.4	39.3	7月12日
近年	5月15日	49.4	27.0	580	10.7	4.3	39.8	7月13日
前年比・差	1	110	110	110	0.4	-0.1	0.9	( 0 )
近年比・差	2	110	105	107	0.2	0.0	0.4	( -1 )

注1) R6：11ほ場平均（生育観測ほ：4ほ場、新品種実用化・ブラ削減 対照区：7ほ場）

注2) 近年値：H29～R5の平均、本年の幼穂形成期は予測値

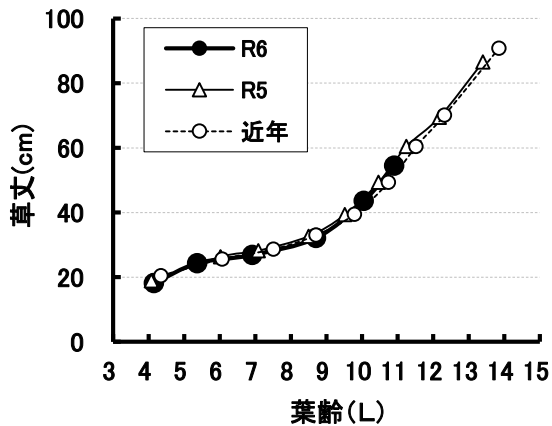


図1 草丈の推移（富富富生育観測ほ等）

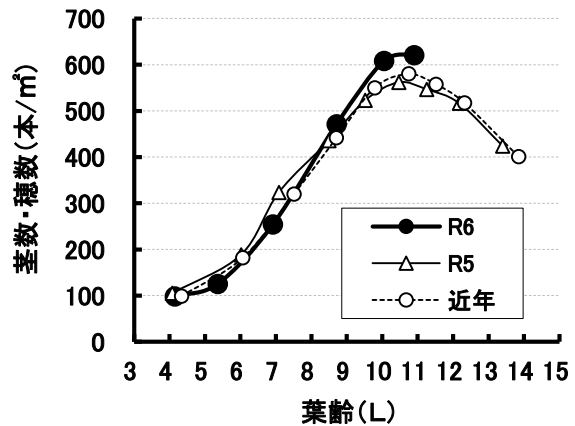


図2 茎数の推移（富富富生育観測ほ等）

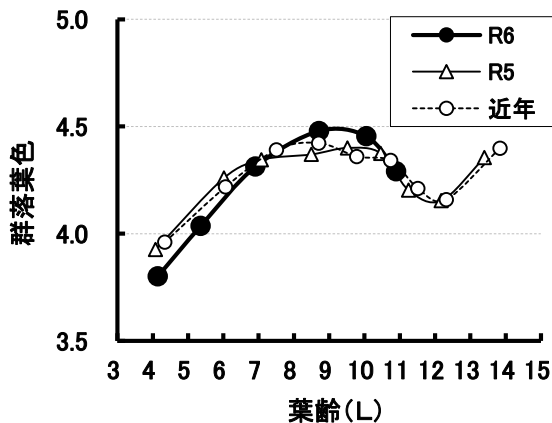


図3 葉色の推移（富富富生育観測ほ等）

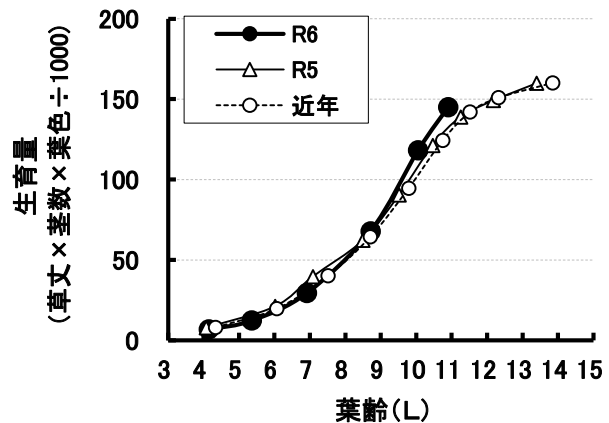


図4 生育量の推移（富富富生育観測ほ等）



## 2 当面の技術対策

- ・ 現在、茎数がやや多いことから、幼穂形成期までは落水期間が長めの間断かん水を行う。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理を行う。  
ただし、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。

### (1) 水管理

- ・ 過剰籾数を防ぐため、幼穂形成期まで落水期間が長めの間断かん水を行い、幼穂形成期の SPAD 値 35（群落葉色 4.0 程度）に誘導する。（表 2）。
- ・ 幼穂形成期以降は、稲体の活力を維持するため飽水管理（足跡に水が残る程度の湿润状態を維持）を行う。ただし、葉色が濃い場合は、間断かん水を行う。

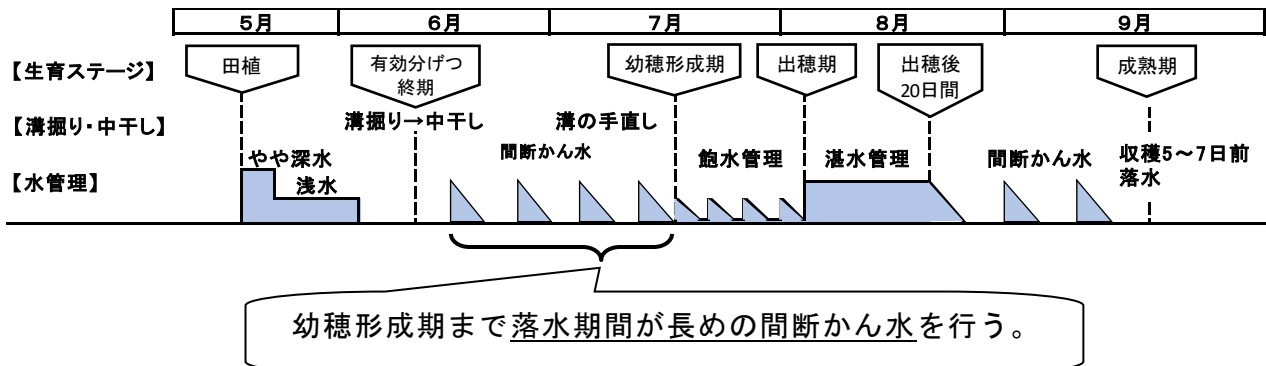
表 2 幼穂形成期の生育の目安

草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	SPAD	群落葉色	生育量	
				SPAD	群落葉色
62	580	35	4.0	125	140

注) 生育量 SPAD : 草丈×茎数×SPAD÷10,000

群落葉色 : 草丈×茎数×群落葉色÷1,000

### <水管理のイメージ>



### (2) その他の管理

病虫害および雑草防除は、コシヒカリに準じて実施する。ただし、生育期間を通じた化学合成農薬の成分使用回数が12以内となるよう留意する。